２０２１年８月９日
日本文学演習Ｉａ（月曜日５限目）
担当教員：塩村耕
名古屋大学　文学部日本文学専攻３年
学生番号　011900883
氏名　小松透緒子

第二二四段に登場する「有宗入道」とは誰か

I. はじめに

疑問を立てて論じる章段として、私は第二二四段を選んだ。私は本稿で、『徒然草』第二二四段に登場する「有宗入道」とは誰かについて、論じる。ここでいう「有宗入道」は安倍晴明の十五代の孫といわれることが多々あるが、それは本当だろうか。安倍有宗が登場する複数の文献を考察し、兼好法師の生没年などと比較して、『雑々拾遺』『実躬卿記』の有宗が『徒然草』の「有宗入道」に該当するが、まだ確かな根拠という点での議論が不十分なので、その他の文献にも重点を置いて、調査を進めるべきだと主張する。

II. 『徒然草』の有宗入道

まず、『徒然草』第二二四段の有宗入道について、整理する。

1. 『徒然草』について

『徒然草』第二二四段に該当する部分は以下である。

> 陰陽師有宗入道、鎌倉よりのぼりて、尋まうで來りしが、まづさし入て、此庭のいたづらにひろきこと、淺ましく有べからぬ事也、道をしるものはうふることをつとむ、ほそ道ひとつ殘して、皆はたけにつくり給へ、といさめ侍りき、誠に少しの地をも、いたづらにをかんことは、益なき事なり、くふ物、藥種などをうへをくへし（注[1]）

ここで、『徒然草』の成立年代について確認しておく。『徒然草』とは「鎌倉末期の随筆。二巻。卜部（吉田）兼好著。題名は序段冒頭の語による。主要部分は元弘元年（一三三一）頃の執筆か（注[2]）」である。さらに、作者の吉田兼好とは「鎌倉後期から南北朝時代の歌人。

---

[1] 高乗勲（1968）『徒然草の研究』自治日報社。
[2] 北原保雄（2000）『日本国語大辞典　第二版』小学館（出典は、JapanKnowledge https://japanknowledge.com/による）。

俗名は卜部兼好（かねよし）。二条派。堀河具守の家司（けいし）となり、宮廷に出仕して蔵人・左兵衛佐に至ったが、のち出家。随筆「徒然草」に、その哲学的・宗教的人生観を展開する。二条家の藤原為世の弟子として、和歌四天王の一人と称せられ、「兼好自撰家集」がある。なお、卜部家が吉田を称するようになったのは後の時代であるから、「吉田兼好」は近世以降の俗称と考えられる。弘安六頃～観応三年以後（一二八三頃～一三五二以後）（注3）」とされている（ただし、兼好の生没年については諸説がある）。つまり、第二二四段で描かれている、兼好が有宗入道と対面した時期は広く見積もっても、およそ1293～1352年頃の間のどこかということとなる。したがって、有宗入道はその期間、生きている人物でなければならない。

2．注釈整理

次に『徒然草』の有宗入道に関する注釈を整理する。左にそれぞれの注釈書の注釈を列挙する。

安倍ノ晴明十五代の孫也。有重が子なり。陰陽ノ頭正三位（注4）

安倍晴明十五代の孫也。有重か子なり。陰陽頭。正三位（注5）

のつちに云、安倍ノ晴明十五代の孫也。有重か子なり。陰陽頭正三位（注6）

（新注）①陰陽頭安倍有宗という（内海・沼波・塚本・吉川・佐野・武田・佐伯）。②陰陽頭安倍有重の男（橘1・武田・山田孝）。『野槌』以後の注に、有宗を陰陽頭正三位とするのは誤り（橘1・橘2）。③伝未詳（西尾1・川瀬・橘2・斎藤・松尾・山田俊・西尾2）。

（古注）●陰陽頭安倍有宗也。○安倍清明十五代ノ孫ナリ。有重ガ子ナリ。陰陽頭正三位。（寿）（注7）

「有宗入道」、寿抄に「安倍ノ晴明十四代孫、有重カ男有宗（改―仲陰陽頭正三　清明ヨリハ十五代ナリ）」とある。橘氏はこれに対して、尊卑分脈に照し合せてみると「改―仲陰陽頭正三」は有重について言

---

3 北原保雄（2000）『日本国語大辞典　第二版』小学館（出典は、JapanKnowledge　https://japanknowledge.com/による）。
4 林羅山『埜槌』（出典は、吉沢貞人（1996）『徒然草古注釈集成』勉誠社による）。
5 松永貞徳『なぐさみ草』（出典は、吉沢貞人（1996）『徒然草古注釈集成』勉誠社による）。
6 加藤磐斎『徒然草抄』（出典は、有吉保・辻勝美（1985）『長明方丈記抄・徒然草抄』（加藤磐斎古注釈集成　3）新典社による）。
7 三谷栄一・峯村文人（1966）『徒然草解釋大成』自治日報社。

っていることがわかる。ところが父有重は後花園天皇の永享十一年正月五日、初めて従三位に敍せられたことが公卿補任で見ると、後小松天皇の應永十二年正月廿九日薨で年七十九の由が記されている。兼好が観應元年六十八歳で死んだ時は有世二十四歳と逆算される。有宗の祖父の有世が既に兼好より四十四歳も年下なのである。これによって系図に見える有宗はここの有宗と別人である、と考証し、寿抄の誤を指摘し、従来の諸註がすべて寿抄に従っていたのを訂正していられる。従って、「名のりの有の字から安倍氏とは推察されるが伝は不明である。」としていられるのに従うべきである（注[8]）

安倍有宗。晴宗の男。生没年未詳（注[9]）

安倍晴明の子孫、正四位下、陰陽頭。伝未詳（注[10]）

有名な安倍晴明の後は土御門家となり、賀茂保憲の末裔は幸徳井を称した。ここにいう有宗は、鎌倉幕府に仕えたものであろう。寿抄以来、晴明の末裔説がとられ、十四代有重の子で、十五代であるといわれた（野槌、大成、佐野、山田、上田）が、橘説に、誤りらしいとされ（佐成）、結局、伝は不明とされるにいたった。陰陽師が鎌倉にもいたことは、吾妻鏡に見えている（注[11]）

「陰陽師」は、第二〇六段に既出。「有宗」は、「有」の字を用いているので、陰陽道を世襲した安倍氏の系統であることが推測される。これについては、「解説」で述べる（注[12]）

安倍有宗をさす（『寿命院抄』）。正四位下陰陽頭。陰陽道の大家の晴明の子孫。祖父親職、父晴宗は幕府に仕えて、その名は『吾妻鏡』に頻出する。有宗も同じような立場にあったものか。ただし、その生没・詳伝などは不明。「陰陽師」は第二百六段に既出（注[13]）

名のりに「有」があるので、安倍氏であろう。伝未詳（注[14]）

---

8 高乗勲（1968）『徒然草の研究』自治日報社。
9 久保田淳（1989）『徒然草』（新日本古典文学大系三九）岩波書店。
10 永積安明（1995）『徒然草』（新編日本古典文学全集四四）小学館。
11 田辺爵（1962）『徒然草諸注集成』右文書院。
12 安良岡康作（1968）『徒然草全注釈　下』角川書店。
13 三木紀人（1982）『徒然草（四）全訳注』（講談社学術文庫）講談社。
14 西尾寛（1957）『方丈記　徒然草』（日本古典文学大系三〇）岩波書店。

このように、おおむね「有宗入道」は、安倍晴明の子孫の安倍有宗とされている。しかし、その伝は未詳であり、階位も正三位や正四位下など、バラバラだ。父親も有重とする注釈と晴宗とする注釈があり、安定しない。そして特に、高乗勲が述べるように、兼好が1350年、六十八歳で没したとすると、有宗の祖父の有世が二十四歳と逆算される。祖父が既に兼好より四十四歳も年下ならば、有宗は1293〜1352年の間に、兼好とは対面できないことになる。すなわち、有宗はその期間、生きている人物ではないのだ。ここから、「有宗入道は安倍晴明の十五代の孫といわれるが、それは本当だろうか」「安倍家の系図に見える有宗と『徒然草』の有宗は別人ではないか」という疑問が生じる。

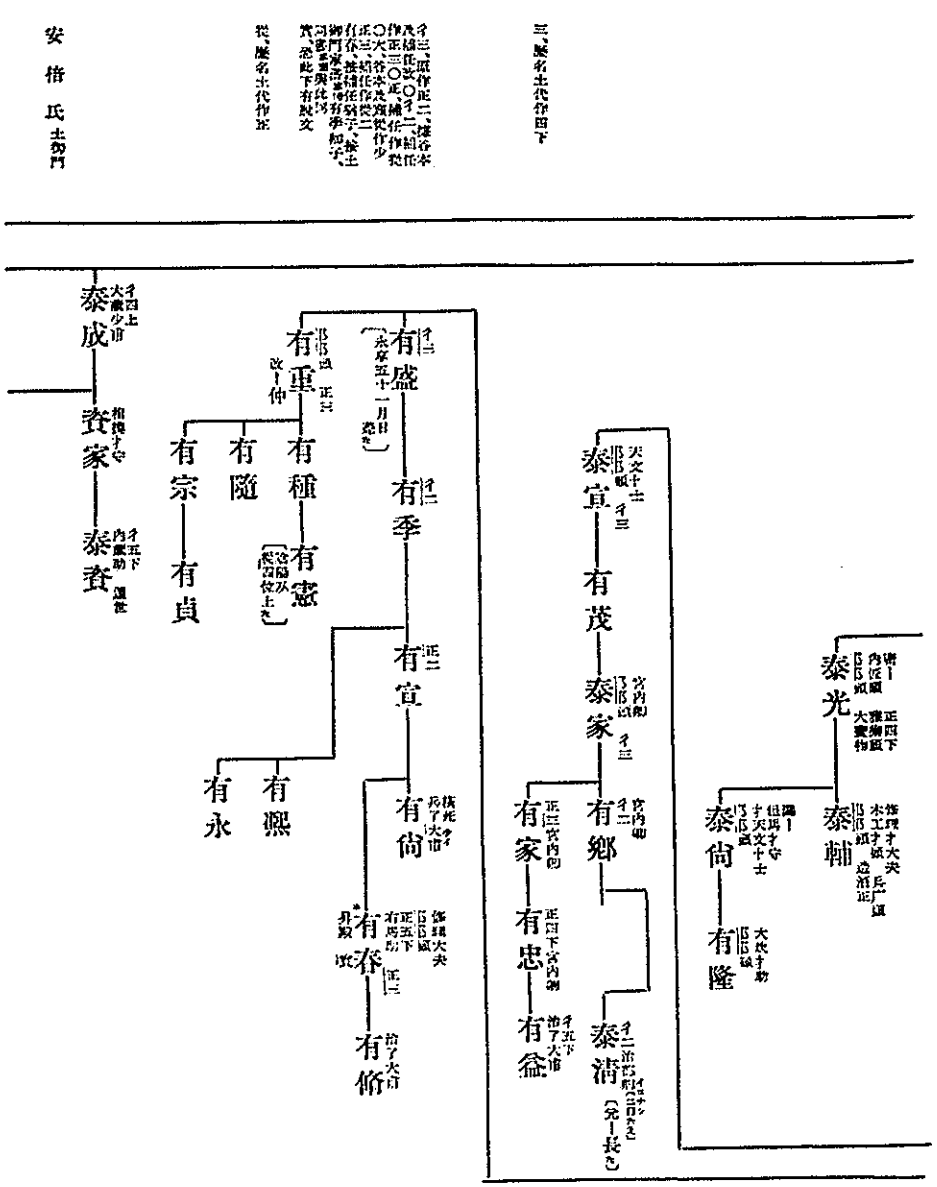
III. 各文献の有宗

よって以降、本稿では、安倍有宗が登場する複数の文献を考察し、兼好法師の生没年などと比較して、1293〜1352年の間に、兼好と対面が可能な「有宗」を探す。

1. 『尊卑分脉』

次の図1は『尊卑分脉』における安倍氏の系図である。

図1：『尊卑分脉』における安倍氏の系図



（注[15]）

ここでは有宗の祖父にあたる、有盛が永享五〇年（1433）に死去したことになっている。したがって、有宗は1293～1352年の間には存在していない。この有宗は兼好と対面が可能な有宗ではないため、『徒然草』の有宗入道ではないと考える。

2．『續史愚抄』

『續史愚抄』では、有宗と思わしき人物が出てくる部分が二箇所ある。「〇十八日壬辰。此日。多武峰神前常灯滅盡由。後日峰寺言。因召二陰陽頭有宗朝臣占文一。御藥及損亡兆云（注[16]）」と「〇八日甲申。春日祭被レ付二一行社家一。上卿申レ障故云。」今夜。行二一幸別殿一。是去六日無二左右一延引。雖二他日一可レ無レ難哉。被レ尋二陰陽頭安倍有宗一。而被レ遂レ之云（注[17]）」だ。しかし、これらのことが起きた年は、それぞれ1481年、1486年である。つまり、この有宗は1293～1352年に存在せず、兼好と会うこともできない。『徒然草』の有宗入道ではないと判断できる。

3．『雑々拾遺』巻第1

以下に挙げるのは、『雑々拾遺』巻第1で、有宗について記述された部分を、私が翻刻したものである。

安倍有宗判うらなひ付明の大宗の事

安倍晴明十五代の後胤従三位有宗入道は。天文の博士にて兼好が友人なり。ことに判形を見て吉凶をいふにひとつもあやまらず。人みな歸依しけり。もろこしにも此ためしあり。異國の書には字を分つ者とあり。みな判うらなひの事也。明朝の大祖いまだ只人のとき。行末の安否きかまほしくて。字をわかつ人の方へゆき。案内して庭に立ながらしか〴〵の事をたづねらるゝに。あるじ立出て何にても文字をかきてみせ給へといふ。大祖持たる杖にて土上に一文を書給ふ。あるじおどろきてさてもめでたき御事なりと拜伏す。とてものついでに今一字をみ侍らむといふ。大祖何ごゝろなく又問の字を書きてみせらるいよ〳〵うたがふ所なく天子の御器量あり。土のうへに一文字を加ふれば王の字なり。後の問の字をわかつ時は。左につけても右に付ても君の字なり。たのもしくおぼしめさるべし。〔…中略…〕大明の史傳に書きのせたり（注[18]）

---

[15] 洞院公定『新編纂図本朝尊卑分脈系譜雑類要集』（出典は、EBSCO https://www.ebsco.com/ja-jp/products/ebooks-intl、黒板勝美（他）（1958）『尊卑分脉 第四篇』（新訂増補國史大系 第60巻下）吉川弘文館による）。

[16] 柳原紀光『續史愚抄』（出典は、EBSCO https://www.ebsco.com/ja-jp/products/ebooks-intl、黒板勝美（1931）『續史愚抄 後篇』（新訂増補國史大系 第十五巻）吉川弘文館による）。

[17] 同右。

[18] 九州大学附属図書館 『雑々拾遺 巻第1』 https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/op

『雑々拾遺』の成立は 1695 年であり（注[19]）、1293～1352 年の間に生きていた人物について、書かれていてもおかしくはない。この有宗は、『徒然草』の有宗と同一人物である可能性がある。

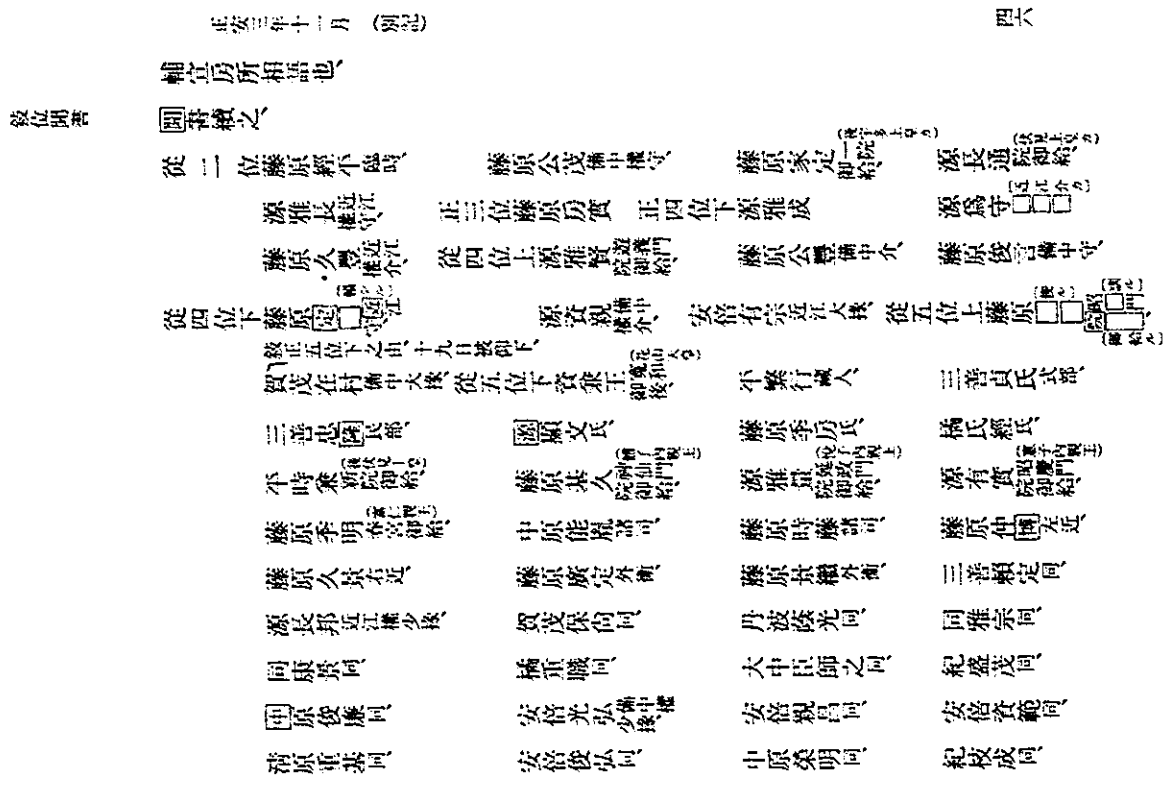
4．『元長卿記』

『元長卿記』の文亀元年二月十日条では、「有宗卿去月廿日逝去（注[20]）」と述べられている。だが、文亀元年は 1501 年であり、有宗がこの年に亡くなったとすると、1293～1352 年には、まだ産まれてすらいないものと推測できる。この有宗も、『徒然草』の有宗入道ではないのだ。

5．『実躬卿記』

次の図 2 は『実躬卿記』にあった、安倍有宗についての記述である。

図 2：『実躬卿記』の安倍有宗についての記述



---

ac_detail_md/?reqCode=frombib&lang=0&amode=MD820&opkey=&bibid=411512&start=#?c=0&m=0&s=0&cv=14&r=0&xywh=1091%2C296%2C1295%2C1195　2021/08/09°

[19] ARC 古典籍ポータルデータベース　https://www.dh-jac.net/db1/books/results.php?e4=zatsuzatsushuui&enter=portal&lang=ja　2021/08/09°

[20] 甘露寺元長『元長卿記』（出典は、新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100135534/viewer/45 による）°

（注[21]）

ここでの安倍有宗は従四位下であり、文書が書かれたのも正安三年だ。これは1301年にあたる。つまり、この有宗は1293～1352年の間に生きていた人物ということになる。『徒然草』で、兼好と対面した有宗と同一人物である可能性は高いと予想できる。

ここまで5つの文献を見てきたが、第二二四段に登場する「有宗入道」とは誰かについて、明確に述べることのできる文献は見つからなかった。『雑々拾遺』『実躬卿記』は『徒然草』の有宗と同一人物の可能性があり、ここから推定することもできるが、2つだけでは根拠として数が乏しい。最終的には、議論が不十分という問題が残ってしまった。

IV. 終わりに

以上、本稿では『徒然草』第二二四段に登場する「有宗入道」とは誰かについて、見てきた。安倍有宗が登場する文献では、『尊卑分脉』『續史愚抄』『元長卿記』の有宗は『徒然草』の有宗と一致しないが、一方で、『雑々拾遺』『実躬卿記』の有宗は同一人物の可能性があるという結論を導く。しかし、まだ根拠の数が少なく、確かな根拠という点での議論が不十分なので、その他の有宗が登場する文献にも重点を置いて、調査を進め、根拠を得るべきだと主張する。

---

[21] 権大納言正二位三条実躬『実躬卿記』（出典は、東京大学史料編纂所古記録フルテキストデータベース https://clioing.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/view/idata/850/8500/06/2004/0045?m=all&s=0045 による）。